

【第一部】公演解説「すみだと梅若伝説」

【第二部】能・義太夫・歌舞伎

謡かたり「隅田川」

【第三部】出演者によるアフタートーク

母の子に対する無償の愛を描く
能・文楽・歌舞伎のコラボレーション

小玉祥子（毎日新聞社学芸部門編集委員）

トーケ・大倉源次郎、豊竹咲太夫、
尾上菊之助

尾上菊之助

笛・杉信太朗

小鼓・大倉源次郎（人間国宝）

大鼓・柿原弘和

淨瑠璃・豊竹咲太夫（人間国宝）

三味線・鶴澤燕三、鶴澤燕一郎

歌舞伎立方（梅若丸の母）・尾上菊之助

世界無形文化遺産にも選ばれた日本を代表する伝統芸能、能・文楽・歌舞伎の第一線で活躍する三人の演者が、能の人気曲「隅田川」を原作にコラボレーションするのが本作である。

もとになったのは「梅若伝説」。わが子、梅若丸を人買いにさらわれた母が悲しみのあまりに正氣を失いながらも、子を探してたったひとりで都からはるばると旅をし、東国の隅田川にたどり着くが、梅若丸は既に亡くなっていたことを知る。埋葬された塚の前で母が念仏を唱えると梅若丸の亡靈が現れ、母子は悲しみの対面を果たす。

墨田区の名刹・木母寺は、梅若丸が落命した場所に供養のため、天台宗の僧・忠円阿闍梨が建てた念佛堂を起源とし、貞元二（九七七）年に創建された。梅若寺とも呼ばれる由縁である。

その「梅若伝説」に取材し、能楽の大成者である世阿弥の子、観世十郎元雅が創作したのが能の「隅田川」である。世阿弥に「類なき達人」と呼ばれるほどに将来を嘱望されながら、三十代の若さで世を去った元雅の代表曲のひとつで、母の子に対する無償の愛という題材が時代を越えて共感を呼び、他の芸能にも取り入れられ、人形淨瑠璃（文楽）の「雙生隅田川」、歌舞伎の「法界坊」や「隅田川花御所染」など「隅田川物」というジャンルが形成された。

梅若伝説を根底に据えつつ、平安貴族・在原業平を中心とした歌物語「伊勢物語」の世界を取り込んだのが作劇の妙で、業平が詠んだ「名にし負はば、いざ言はん都鳥、わが思う人は、ありやなしやと」の詞章が巧みに取り入れられている。こうした洗練性も能

題材が時代を越えて共感を呼び、他の芸能にも取り入れられ、人形淨瑠璃（文楽）の「雙生隅田川」、歌舞伎の「法界坊」や「隅田川花御所染」など「隅田川物」というジャンルが形成された。

梅若伝説を根底に据えつつ、平安貴族・在原業平を中心とした歌物語「伊勢物語」の世界を取り込んだのが作劇の妙で、業平が詠んだ「名にし負はば、いざ言はん都鳥、わが思う人は、ありやなしやと」の詞章が巧みに取り入れられている。こうした洗練性も能題材が時代を越えて共感を呼び、他の芸能にも取り入れられ、人形淨瑠璃（文楽）の「雙生隅田川」、歌舞伎の「法界坊」や「隅田川花御所染」など「隅田川物」というジャンルが形成された。

梅若伝説を根底に据えつつ、平安貴族・在原業平を中心とした歌物語「伊勢物語」の世界を取り込んだのが作劇の妙で、業平が詠んだ「名にし負はば、いざ言はん都鳥、わが思う人は、ありやなしやと」の詞章が巧みに取り入れられている。こうした洗練性も能題材が時代を越えて共感を呼び、他の芸能にも取り入れられ、人形淨瑠璃（文楽）の「雙生隅田川」、歌舞伎の「法界坊」や「隅田川花御所染」など「隅田川物」というジャンルが形成された。

そう話し終えた渡し守は、舟も着いたので下りるようとに母をうながす。母は渡し守に話の内容を問い合わせ、その少年こそ自分が探していた梅若丸だと語る。渡し守に梅若丸を埋葬した塚に案内された母は、もう一度、姿をみせてくれと嘆く。なだめる渡し守のすすめで母が念仏を唱えると梅若丸の声が聞こえ、姿が見えるが、それは幻であった。

隅田川の渡し守（船頭）がいる船着き場に旅人と梅

文楽太夫の豊竹咲太夫は、能の「隅田川」に「隅田川物」のひとつで東北に伝わる「白川合戦」を組み合わせた「謡かたり 隅田川」を梅若丸の母にシテ方観世流の野村幻雪（当時・四郎、二〇二一年没）を迎えて二〇〇五年に東京で初演した。同作は能・文楽の異種交流の試みとして話題となつた。

やはり文楽座を代表する太夫であった咲太夫の父、八世竹本綱太夫も、歌舞伎俳優の八世松本幸四郎（初代白鸚）と組んで一九五九年に「嬢景清八嶋日記」の三段目「日向島」を上演するなど垣根を越えた試みに積極的であった。現代の文楽をリードし、昨年度の文化功労者に選ばれた咲太夫もその志を引き継ぎ、復曲などにも取り組んできた。「隅田川」もその試みのひとつであった。

二〇一四年には幻雪監修により、梅若丸の母に歌舞伎花形の尾上菊之助を迎えて、NHK・Eテレの「にっぽんの芸能」で、宗家藤間流の藤間勘十郎振付による本公演と同形式での上演が収録・放送された。初演からさらにブラッシュアップされ、歌舞伎を加えた三つの芸能のコラボレーションとなつた作品は好評で、二〇

一九年に東京のセルリアンタワー能楽堂で再演された。能の「隅田川」の詞章に加え、梅若丸の母が隅田川に至るまでの京都からの長い東下りの道中の名所の風景を入れ、人賣いが梅若丸を容赦なく虐げる場面を盛り込むなど、独自の工夫も施されている。情景描写はもちろん渡し守の詞章も咲太夫が語り、母の菊之助と掛け合いになるのも、見どころ、聞きどころだ。

能では梅若丸の亡靈は子方が演じる。世阿弥の芸談「中樂談儀」には、現実の子ではなく亡靈なのであるから、舞台に登場させない方がいいのではという世阿弥が元雅と論争になつたことが記されている。今回舞台に登場するのは母の菊之助のみ。梅若丸の登場がどう表現されるのかにもご注目いただきたい。

作調は能楽小鼓方大倉流宗家で人間国宝の大倉源次郎。古典はもちろん新作能や復曲にも取り組み、国内のみならず海外公演への参加も多い。本作には二〇〇五年公演から参加している。

「日本の芸能は雅楽、能楽、文楽、歌舞伎、日本舞踊と縦軸ではひとつ日本の文化になつておりますが、コラボレーションは本当に難しい。同じ小鼓でも能と

けたら、成功だと思います」と意欲を見せている。

菊之助は歌舞伎の尾上菊五郎の長男に生まれて音羽屋を継承し、立役・女方の両方で充実した活動を展開している。芸に取り組む真摯な姿勢には定評がある。「魚屋宗五郎」の宗五郎、「髪結新三」の新三などの世話物の立役、「鏡獅子」「京鹿子娘道成寺」などの女方舞踊から「盛綱陣屋」の盛綱などの時代物の立役、さらには人気漫画を題材にした「風の谷のナウシカ」など新作にも果敢に挑んでいる。七十年代の咲太夫、六十代の源次郎に比べると圧倒的に若い四十代である。

「大先輩の中に身を置かせていただき、梅若丸の母を勉強しました。平安時代に起きたお話ですが、母親の情愛は普遍的で現代でも変わりません。梅若丸の母は、大変に危険な道程を子供に会いたいという思いひとつで旅をしてきました。その母親の心を思うと非常に心が痛みます。子供に対する母親の情愛を一層深めていければと思っております」と思いを語った。

歌舞伎では演奏方法が違います。この垣根を取り払うにあたり、咲太夫先生のリーダーシップと野村先生のご指導があつたうえで作調、編成のお手伝いをさせていただきました。能楽の鼓と笛と大鼓が作り出す世界と義太夫の太棹三味線が、化学変化を起こして独特の世界觀を生み出し、そこに菊之助さんの世界が立ち上がりてくるところに共同制作の意味があると思つておりります」と作品への思いを語った。

源次郎の小鼓、杉信太朗の笛、柿原弘和の大鼓が菊之助の舞と相まって母の心情を切なく描写する。杉は「母親の心情をより引き出せるような笛ができればと思ひます」と語った。幻雪からは母親が南無阿弥陀仏と唱え始める場面では、「子供の声を現すように優しく吹きなさい」と助言されたという。

文楽の三味線は二〇〇五年時にも参加した鶴澤燕三が担当する。「この曲は全体として非常に緊張を強いられる出来上がりになつておりまして、まったく気の抜けないものです。最後に母と梅若丸の亡靈が出会う。そこで大盛り上がりになり、緊張の極みで終わるのが最大の魅力です。それをみなさんに感じ取つていただ